

木の皮をかじり冬を越すニホンザル

一月ともなると野山は一面雪におおわれます。山の動物たちの中には、ツキノワグマのように木の洞などで冬眠するものもいれば、カモシカやキツネのように雪の中で生活するものもいます。冬、ニホンザルはどんな生活をしているのでしょうか。

世界でもっとも北にすむニホンザル

サルの仲間の多くは、熱帯から亜熱帯にすんでいます（図1）。温帯の日本列島にすむニホンザルは世界でもっとも北に分布するサルで、南は屋久島から北は青森県下北半島まで見られます。富山県に

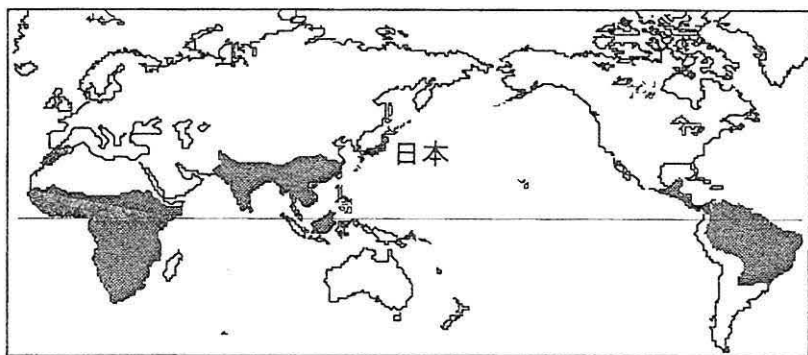


図1 サルの仲間の分布

は、東部の山地に70以上の群れがあわせて2,000匹以上生活し、そのうち、黒部峡谷には31の群れがすみ（図2）。明治時代には県西部の五箇山地方にもすんでいましたが、今では見られなくなりました。ふつうは数十頭の集団で生活しますが、ときどき群れから離れたサルが見られることがあり、呉羽山にもやってきたことがあります。

冬の生活

ニホンザルの食べ物は、草木の葉、木の実、種子、昆虫などです。北陸地方の冬の野山は、草木が雪におおわれるためエサをとるのがむずかしくなります。積雪が少ない間は、山の斜面で草の芽やササの葉、秋に落ちた木の実などを食べ、積雪が多くなる真冬には、春から秋はほとんど食べない木の皮や冬芽を食べます。サルに皮をはがされた木の枝は遠くから



図2 黒部峡谷の群れの分布（○の部分の一つの群れ。峡谷ぞいに31の群れが生活します）〈赤座（1987）より〉

でも白っぽく見えます（図3）。白山のニホンザル（オトナのメス）では、11月に10～14kgあった体重が2月には平均で2kgも少なくなった例が知られています。体重の減少は、脂肪ばかりでなく筋肉もへらし、まさに身をけずってきびしい冬をすごしていることがわかります。

冬は雪が多いので行動範囲がせまくなります。吹雪の時は、木の上でたがいに身を寄せ合いじっとしていることが多くなります。気温の下がる夜は、寒さをふせぐため木の上でかたまって寝ます。雪の中を移動するときは、一列になり前のサルが雪をふみかためた跡を歩いていきます。このようなサルたちの行動から、冬はなるべくエネルギーのむだを少なくして生活しているのがよくわかります。

春が間近になっても、雪どけがおそく根雪の期間が長びくとエサがとれません。そのため、冬の間に体力を消耗したサルにはますますきびしくなり、体力の弱い子供や年老いたサルの死亡率が高くなります。また、秋のブナの木の実やミズナラなどのドングリは、冬を乗りきるための大切な食べ物ですが、毎年豊作とは限りません。不作の年は秋に十分な食べ物がとれず、いつもの年よりも冬の生活がきびしくなります。雪国で生活するサルたちは、新芽や若葉などのエサが豊富になる春を待ちわびていることでしょう。（南部 久男）



図3 皮をはがれされた枝とニホンザル（黒部峡谷、加藤満氏撮影）
雪の多い冬は、木の皮を食べてうえをしのぎます。



富山市科学文化センター

〒939-8084 富山市西中野町1-8-31 TEL(0764-91-2123)

ホームページ <http://www.tsm.toyama.toyama.jp>

平成11年1月5日